

翻刻『名筆傾城鑑』（下）

翻刻の会

一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

- 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。
- 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
- 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

9 底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかった。

二、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

岡島弓恵、亀井佐代子、鶴原利恵、谷地館和賀子、渡辺千尋

文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

第六 大津絵の段

大津八丁走り井を息をもつがず一ト飛に。心も関の明神を横へ切したる我家の門ト。又平は声あらく明ヶよくの其声に。女房お徳相借屋どやくと走り出。お手柄く出来ましたとあふぎ立れば。

先ッおのくのおかげにて。どふやらかうやらしおふせた忝しと一札に。隣の八兵衛が引取ッて。何シのいのわしらも宛のない事はせぬ。こなたの吃が直るといひ。土佐の名字はもらはしやる。相借屋からつなぎ(三十五ウ)の樽肴。時節がら

也まいらせりやたばるで。夜一トよさ駄賃なしの家来分シ。是で祝義はずつてじやぞや。扱ッても算用当世く。コリやお徳

姫君の御機嫌は。それはくお悦び将監様へちやつとしらそふか。イヤく。そこら所でない気にかゝるは似太のばりめを。

あつちに残し置たれば尻のくるは定の物。コレ長兵衛殿まちつとの所。こつちから樽肴で頼ます。此便り聞迄と噂半へ。

走りくるく似太郎が。振袖ながらほへ頬か、へ。

エ、むごたらしい旦那殿。こはいめに合ましたと大声上ケ。エ、エくと泣わめく。

ヲ、道理く。そふしてあつちの様子はどふじや。あつちでかへ。エ、わしや恥かしい。何が恥かしい事が有。シテく。

さあ其してくにはつとよはつた。無理な事ばかりぬかしくさつた。それでわしも思ひあきらめ。ア、(三十六オ)ま、

よ。わしも十九のやくだゝり。どふで跡では有馬へ湯治するぶんと。覚悟をしたれは。綿帽子取ッて見て。それから跡は踏

たり蹴たり。所をぬかさにや切殺すとぬかしくさつた。わしもこはさに所を残らずいひました。あれくあそこへ大勢がと

詞の中に高桃燈。とつたくの人音ト足音ト。皆々俄に胴ぶるひ。脚もすはらず膝がたく夢になれとぞ震ひある。

又平は胸をすへ。かふ有ふと思ひし故。道々分_リ別して置た。日外狩野の四郎次郎。高嶋の館にて虎を画て。働せし事隠れなし。それにこりたる館のやつばら。こつちも手の物大津絵にておどしてくれん。おのくも明日からは。みせの商ひせねばならぬ身。顔見しられては為事の邪魔。幸_イの商売がら丹(三十六ウ)緑青にて顔をぬり。追ッ手をあざむく目くらまし。所の明神蟬丸の氏子を守る奇瑞にて。敵の目をくらまし給ふも神の徳。主人へ忠義の我魂。なとか。納受なかるらん。姿をかへて一ト働き頼_ムに頼もしき。長兵衛八兵衛も心得たと。似太も俱々内に入。

程なく雲谷大勢引つれ追取りまき。ヤアく又平。様子は聞ずと覚あらん。姫を渡せ渡さずば。打殺して奪ひ捕いかにくと呼はつたり。又平表に立ちふさがり。エ、無念_シ千万_ン。是迄は仕おふせしが。かく大勢にて取込_メられ。又平が運の極め去ながら。我かならひこんなる絵の徳をもつて。今一ト働きの手並を見せんと。いふより早く刀ひんぬき。ゆんでの腕突ぞと見せし目くらまし。口に茶碗の絵の具をふくみ。大(三十七オ)津絵はりし襖を目かけ。ぱつとふけばコハいかに。襖俄にめいどうし。ばたくと鳴り渡る。

雲谷大きに嘲り笑ひ。雁がとべば石亀もじだんだ。アレぶちこぼつてうばひ捕。承はると大上団八同じく三八。雲谷が弟子長谷部の等敵。其外家来下知を請おめいてか、れば。あらふしぎや。いひしに違ひも荒奴。まだほのぐらき暁の。鳥毛の鎧さきふりまはし。露の命を君にくれべい。カとうしつかとふれさ。く。くふれく。長兵衛殿。八兵衛殿合点じや。合点と追まはされ。虎にかまれしあぐたれ共。こりや叶はぬと跡ずさり。

等敵いらつてぬき打に切こめば。かた肌ぬいだる立テ髪男。大盃_キをひらり。くとひらめかし。眉間にふつ(三十七ウ)

たるところからしヲ、から。ヲ、から唐錦。あやめもわかず引返す。

三八かはつて物々しやと。太刀ぬいて振まはす。こなたも振袖女わざ。にた／＼笑ひ似太郎が。藤のしなへにはひまつはれて。よれつもつれつ。しほらしやく。ながめもわかぬ花くらべ。しと、うてば。ひらりとばづし。請つほといつ甲斐ぐしく。切てかゝる有様は。なみや鯰のひやうたんたん。もつてひらいてはちたゝき。たゝけばすべりうてばすべりぬらり。／＼と手に廻らず。

犬上たまらず入かはれば。座頭一人とほ／＼。おんらが在所はノ。奥山ので、打の。でんぐり／＼くりの木の。木の根を枕にころび寝。此小女郎は恋する山家の品者で。なまい（三十八オ）だんぶつ／＼。鬼の念仏かみくだく。撞木を持ッてたゝきがねくはん。／＼。／＼。／＼。たゝき立たるめつた打。又平も諸共に太刀かざす勢ひに。雲谷主従しどろになり逃るをやらじと追ッて行。

跡には女房姫君二人。長おひ無用と。とゝむる所へ。等敵団八取てかへし。おのれ女め遁さじと。小腕取ッて膝にひつき。早縄たぐり既にかうよと見へし所へ。

真一文字にかけ来る侍。二人が首筋両手につかみ。大地へどうどもんどりうたせ。姫君かこひし名護屋山三ふんちかつて立ッたりける。

二人はほう／＼起上り。ヤア儼レは山三。よい所へうせあがつた。しかし我等が手に合ず。雲谷殿へ御しらせと。にげ行向ふにどつ（三十八ウ）こい将監立ふさがり。二人を二人が拝み打四つに成て死てげり。

山三將監に打向ひ。子細は互に存の通り。いふに及ず拙者が身は。道大親子が讒言故。御勘シ氣うけて此仕合。殿にもお上の御咎。只今にては閉居の御身。某忍んで御目にかゝり。貴丈の噂硯のかたわれ。鮫鞘のお腰の物迄下タし給はり。いてうの前を助けて殺す。工夫をせよとの御詞と。語るに將監打點き。ム、姫君を助けて殺す一ト思案。成ル程。將監が思ひあたる事も有し共。それは重ねて。御辺は四郎次郎の行衛を尋来られよ。いかにも。弥頼む早お暇と姫君に一礼述べらいてうの前。必早ふ四郎次郎様。お供申て下されや。頼ムくの折から又平立(三十九才)帰り。是は將監様先ッお悦び。敵のやつばら蜘蛛の子同然。一ツ疋も残らず追ツちらし。次イ手に相借屋のわちよ達チ送りとゞけて立ち歸つた。ヲ、手がらく。始めて逢し此山三。姫君の御身の上頼みの印シは此金シ。御台所の御情姫様への御恵と。渡せば又平押し載。然らば我等は是より直クに身を隠し。姫君を忍ばせ申さん。夜明ケぬ内に早お暇。ヲ、此將監はしらぬ顔。是非某へ詮来らん其時は。姫君を助けて殺す一ト思案。山三もぬからぬ一ト思案。姫君伴ひ夜ぬけをするも一ト思案。さらば。おさらば。いざさらばと。三人三方別れ。姫のゑにしは山三がたより。縁をむすぶの名古屋帯ひきわか。れゆく。三重へこのひのやま(三十九ウ)

第七 道行思ひの赤檐

契情の色を名づけて。彼とは里のかへ言葉。其狩野故に幾くるわ仕替らるゝも浮ふしの。まことなりとは思はくの。人はしらじな白雪の。つもるつるがの遠山も。同し流を三国にて。名は勝ッ山のかつふつに逢も見もせぬ人故に。ならや難波の浮つとめ。浅ぎく。よるべなき。伏見の里で。浅香山。名はかはれ共元信を。したふ心は川竹の。外の勤は。いや

くくよいやくくよ。いやらしと。いつも出口へわしや立ち花の。松の位を引さげて。やり手奉公に島原へ売りかへ
らるゝ今の身も。花（四十オ）をさかせし全盛のうつり。残りし。くるわ駕籠。おろせ肝煎諸共に。跡に。へつらせて。
かちひらふ。二こく草履も紫の。色のみばへの。かむろ引舟やりて迄。里の名残と見おくるも。ほんになじみの撞木町。
跡に見なして墨染の。かゝへ引しめ。綿ぼうし。つゝむ顔さへ。深草の。里をはなれて道草の。跡や先なる旅人が。は
でな風俗はでな供。恋を商ふ身なりとはそれか。あらぬか。おぼつか浪の藤の森。花の。つほみの。つき出しよりも。いと
しかはいの。人故に。所々の勤して。稲荷の鳥井幾度か休む玉やのたまゝにも。逢嬉しさがあればこそあはぬつらさの
かずくは。よみつくされぬ。三の橋。渡りくらべんはし柱引ふね（四十ウ）かぶろがあだ口も。今身の上に。あひそめ川
の。ふかう成ル程。あはれはせいで。こすにこされぬ。くるわの関よ。わしも勤メなれば情しらぬでなけれ共。遠山に間夫
がついてうき名立テるも儘のかは。あの加茂川も。流レの身水もらさじとちかひしを。思へは昔たけぐまの。松をふたりが
仲人にて夫婦とならばどふかうと。末の事のみ組たつる。八坂の塔のたうとくも。ふり返り見る東山。あれくくと。
禿やりてかゆびをさす。清水寺の遅桜。さかり有ル身も。恋路故。一ト筋道を真直に。七条通はり川のよどみしへ水も粹な
らば思ふ人より其外に仇な枕をかさはさぬをかはいと。思ふてくれよかし。くれぬ先きにと急ぐ程。若しる人に大宮の町はさ
ながら。恥しと顔をおほへば今の身に。（四十一オ）あたる唱歌のはやり歌。あじな所で。互に顔を。見合て。どふいふて
よからやらア、おまへにとふたらいはしやんしよ。くぜつした夜は。互にすまぬ。其跡は。どふいふてよからやらア、おま
へにとふたらいはしやんしよ。うたふ声々ほの聞へ。早里。ちかくなりければ。ほんに皆の衆なじみ迎ふこそ送て下さ

んした。もふこ、からさらばやと。いふに皆々立よりて。随分おまめで大夫様シ。イヤわしや今からもふやりてと。か、へをといて帶しめ直し。わしが稚い名はおみつ。夫レをかたどりやりてのみやと。釣せしかごに用意せし。から紅の前垂姿。此ふろ敷には八丈の裕しゆすの帶。ヲ、合点。身付キは跡からかこの衆太義。皆の衆さらば。さらばくと夕嵐。朱雀ののべに吹そひて。名残惜げに見返りく行も。恋路の肝煎が。提しふる敷キひがいきの島原。さして三重(四十

一ウ)

第八 大門口の段

あふて立ッ名が立ッ名の内か。あはでこがれて立ッ名こそ。誠たッ名の内なれや。里は都の。ひつじさるなり通ひても。通ひたらぬぞ三筋町西の洞院中どうじ。ゑもんが馬場の遅桜出口の柳こきまぜて所。がらなる色くらべ。里に名高き葛城はたそかれ前の揚屋入。引舟やり手禿の金吾。大門口の腰かけをかい柳の下かげに。たばこ吸付ケコレお亀殿。向ふからくる人たれ。またあの子が。わしが目の近カいのをなぶろでの。あれか。あれはお客。ヲ、いしこ。大夫様シ。あれをお客じやといなヲ、おかし。(四十二才) あれはこなんの色。又ましやるがの。わしが色とはサア誰レじや。ハテこなさんは亀。向ふからくるお人は舞鶴やの伝三様。鶴と亀とが舞遊ぶ。ヲ、ぼつばらぼ。内義様にいふてやろ。まだべりやるかと。追ッかけごくらのほたへざかり。

葛城も袖覆ひ。ア、あぶな。けが仕やろぞや。アレとめていの幾野殿。コレく大夫様の呵てじや。それく掃溜山へあがつて。海老の皮で足つきやんなや。突たら大事か心中する人さへ有ルと。あだ口チタの其中へ。

舞鶴屋の伝三郎牽頭の茂七。禿やり手を引捕へ。サア科人はおさへたぞ。大夫主の決斷所さはぎを見よふと引ッ立て。是はく大夫主。わるあがきのお大将。此頭取りは（四十二ウ）葛城様に極つたぞ。是はめいわく。此葛城を科人とはへ。ハテ開帳場の内陣入と。裏表の此門口。外へ出るのに錢が入。廓の法をお背きはコリヤ茂七。謀反の腰押か有はいの。そりやしれた事爰な焚燬。ヲゝゑら。此お亀をはんくはいとは。ハテ門破り。古しく。古くば景清。心はへ。貴公の頼の赤さでは。悪ひつ兵衛に極つたと。いひ捨門へ逃入ば。ヲゝ景清は平家方。頼もはたも赤かろふ。みをのやらぬと追て行。郭のほたへさはがしし。

伝三は跡を見送ッて。大夫主どふじやいな。すつきりさへぬ顔持。常住灸すへた跡のやうに。又山様を見にお出か。私は今日。町方屋敷方のお客へお見廻次手に（四十三オ）四条辺祇園町へも寄たれば。あの辺でもおまへの身の上。名古屋帯のはやりうた。あはでこがれて立名こそ誠立名の内なれや。とひく。うたふ。所をおまへかひよつと伴様へ気がかたむいては。一番此伝三が立ませぬ。ヲゝいやいな。伝三さん。山様といひかはせしは歌の通り。身受の埒が明迄は外の客はいふに及はず。此廓では帯とかぬかたい約束。伴様は歴々。山様は御浪人。そこらのいきちを立るのか。此道での第一かと。思ふはわしが生れ付。伴様の事いひ出しても下んすなど。いふに伝三は横手を打したり。きよといぞ。女郎の吉粹天一天上照ふりなしのお心いき。私も廓では伝三郎。商売こそ拙く共。男一疋やつてくれふと思ふて居（四十三ウ）ます。おまへもしてじゃ。此比きた和国主のやり手のみや。れそは敦賀で遠山といふた大夫職。色故爰迄仕替にきて。勤はいやとやりての奉公。其品のよさ智恵まんく。きやつと三人心を合せ。伴左殿に鼻明かせ。山三様へお前の身受ケ。此相談はどふあろぞ

い。夫レは嬉しい。みや殿にいて頼もふじや有まいか。いかにもそふと立上り。アレく向ふへ大じんけ伴左殿に極まつた。それくこちらへ山様が。逢てはやかまし大夫主と。連て幾野伝三郎伴ひ。へてこそ門へ入。

夜ごと日ごとに。通ひくるわの一方口。両方同じ深編笠。当世風の長羽織。衛門がばゞの通ひ路を互にそれと出合頭。笠傾て名護屋山三。様子有げに用水桶のかげにしばらく(四十四才)ひかへゐる。

伴左衛門家来を近付ケ。わいらは是から直々に屋敷へ帰れ。小用聞やつ一人残せ。用事あらば早速しらせよ。帰りがけに名護屋山三。見付次第にふちのめせ。素浪人の分際で。葛城が身受ケ沙汰片腹いたしぜひ今宵は葛城と手を引合て門を出る。其時は迎いの乗物心得よと。ぜいの一ぱい門一ぱい。町幅せばしと別れ行。

跡に山三がとつ置イ。エ、につくいほうげた。四郎次郎に廻り逢迄は大事を身に持ッ此山三。思案の外の葛城が。恋路に迷ふと世の人の譏を受ケるも合点たり。踏込で切さげふか。イヤくく。所もあしし帰るを待つてと。行つ。戻りつ忠と。恋との一筋道。

いきせき急きの早使イ。山三にどうと行当り。何者じや道のどう中。エ、此色里の切り共めか。(四十四ウ)人の懐中宛にするどふすりめらと。いひ捨行をひとつらへ。馬鹿め。眼コを明ケ身は二タ腰。糠味噌汁の明キ盲と。ほうり付ケられ口へらず。イヤうぬが二タ腰こはくない。身が御主人を誰とか思ふ。忝くも不破の道犬様御子息。伴左衛門様へおめでたの早使イ。待つておれ此御状をお渡し申。存分にさいなまんと。かけ行首筋引ずり戻し頭転倒。起上るを踏つ蹴つ。目鼻もわかぬ抜打ちむね打。コリヤゆるせ。御免くと言捨門へ逃ケ入ける。

エ、命^{めい}冥^{めい}加^がな腰^{こし}ぬけめと刀^や納^{おさ}る足^{あし}元^{もと}に。蹴^けちらかすかに文^ふ箱^げの一通^{つう}。紐^{ひも}をとくく月^{つき}かげに。上^う書^き見^みれば。不^ふ破^は伴^{ばん}左^さ衛^ゑ門^{もん}同^{どう}名^な道^{だう}犬^{けん}。封^{ふう}押^おシひらいて一^{いち}チ々に。読^よも終^おらず恠^びりく。くり返し見る惡^{あく}事^じの段^{だん}々^々。ム、く。扱^はは此^こ度^ど義^ぎ賢^{けん}卿^{けい}の閉^へ居^{きょ}の御^ご身^み。姫^{ひめ}君^{きみ}の身^み(四^し五^ご十^じ才^{さい})の難^{なん}義^ぎ。四^し郎^{らう}次^じ郎^{らう}と我^わ身^みの怨^あは。将^{しょう}軍^{ぐん}家^けの執^{しつ}権^{けん}三^{さん}好^{こう}国^{こく}長^{ちやう}と。道^{だう}犬^{けん}が心^{こころ}を合^あせ。高^{かう}嶋^{とう}の家^けを伴^{ばん}左^さ衛^ゑ門^{もん}に納^{おさ}めせん工^くよな。将^{しょう}軍^{ぐん}義^ぎ輝^きは色^{いろ}におぼれし無^ふ道^{だう}人^{じん}と。道^{だう}犬^{けん}が直^{ちき}筆^{ひつ}手^てに握^{にぎ}りしはよき証^{しやう}拠^こ。殿^{だん}の武^ぶ運^{うん}我^わ身^みの運^{うん}。姫^{ひめ}四^し郎^{らう}次^じ郎^{らう}の運^{うん}命^{めい}もひらくる時^じ節^{せつ}は此^こ一通^{つう}。忝^{かたじけなく}しと押^おシいたゞき。天^{てん}を拝^{はい}し地^ちを拝^{はい}し悦^えびいさむぞ道^{だう}理^りなる。折^はれ中^{ちゆう}からふりくる春^{はる}雨^うに。傘^{かさ}片^{かた}手^てに伴^{ばん}左^さ衛^ゑ門^{もん}以^{もつ}前^{ぜん}シの使^しイが小^{せう}挑^{てう}燈^{とう}。二^に人^{にん}連^{れん}にてうろく眼^{がん}。うろたへ者^{もの}めが大事^{だいじ}の御^ご状^{じやう}。どこらで落^おした。慥^{たしか}爰^{こゝ}らと尋^{たづ}廻^{まわ}る大^{だい}門^{もん}シ口^{くち}。見^み越^この二^にかいは三^{さん}味^みの音^{おと}や。思^{おも}ふ中^{ちゆう}にも隔^{へだて}の襖^{ふすま}あるにかひなき捨^{すて}小^{せう}舟^{ふね}。伴^{ばん}左^さ衛^ゑ殿^{だん}。く。誰^{たれ}じや。イヤくるしうない身^み共^{ども}じや。そつちが苦^{くる}しうなうてもこつちは苦^{くる}しい。それくそれじやないか。イヤこりや鼻^{はな}かんだ紙^し。エ、(四^し五^ご十^じ才^{さい})そちらを尋^{たづ}よ。心^{こころ}得^{とく}こちらへ名^な護^ご屋^え山^{さん}三^{さん}。挑^{てう}燈^{とう}たくつてつつ立^{たち}テば。以^{もつ}前^{ぜん}シの使^しイ始^{はじ}メの手^てこりに顔^{かほ}見^みて恠^びり。見^み返^{へん}りもせず逃^{にが}ケ失^うける。山^{さん}三^{さん}しづくあゆみ奇^き。珍^{めづ}らしい末^{すえ}宗^{そう}殿^{だん}。春^{はる}平^{へい}殿^{だん}御^ご堅^{けん}勝^{しょう}。イヤ此^こ方^{かた}の無^む事^じよりそこ元^{もと}ト御^ご親^{しん}子^しの御^ご堅^{けん}勝^{しょう}は。山^{さん}三^{さん}が悦^えび。伴^{ばん}左^さ衛^ゑ殿^{だん}。先^{せん}キ程^{ほど}よりお尋^{たづ}なさる、は是^{こゝ}か。イヤ其^{その}御^ご状^{じやう}は。イヤ先^{せん}ツ待^{まち}タれよ。此^こ状^{じやう}は其^{その}元^{もと}の親^{しん}父^ふ。道^{だう}犬^{けん}老^{らう}の直^{ちき}筆^{ひつ}。三^{さん}好^{こう}国^{こく}長^{ちやう}と心^{こころ}を合^あせ。主^{しゅ}君^{きみ}をたばかる親^{おや}子^こが惡^{あく}事^じ。ふしぎに山^{さん}三^{さん}が手^てに入^いて。残^{のこ}らず披^ひ見^{けん}致^ちした上^{うへ}は絶^{ぜつ}体^{たい}絶^{ぜつ}命^{めい}。伴^{ばん}左^さ衛^ゑ門^{もん}。腕^{うで}廻^{まわ}せ。但^たシ踏^{ふみ}のめしてく、し上^うケふか。何^{なん}シと。く詰^{つめ}かけられ。胸^{むね}に覺^{おぼ}エの伴^{ばん}左^さ衛^ゑ門^{もん}大^{だい}小^{せう}ぐはらりと投^なケ出^でし。どつかとすはつて首^{くび}指^{さし}のべ。サアさつぱりと遊^{あそ}ばせ。山^{さん}三^{さん}殿^{だん}。親^{おや}の工^く我^わ身^みの惡^{あく}ク事^じ。一^{いち}時^{とき}(四^し十^{じゅう}六^{りく}才^{さい})に事^{こと}頭^{あたま}はれし其^{その}一^{いち}通^{つう}。我^わ筆^{ひつ}

にて我科の証拠と成るも皆天命イ。かく露見の上エは申ス事も何シにもない。ガ。山三殿一ト通り聞てたへ。誠の武士の魂は忠孝の二ツつ。其二字の内一ツつの願ひ。成ル程親道犬が工にて。三好国長に賄賂して。主君義賢いてうの前を科に落し。高嶋の家国を奪ひ取らんと父道犬。某への物語南無三宝。大悪心と思へ共。此事御辺の耳に入らば。勿体なや親人を。子的身として逆礫にかくるも同前シと。わざと悪ク事に交り。今日迄は過せしが。今頭はれしはまだ某が運の尽ざる所。此伴左衛門を刻なりと。逆礫なりと御辺の心任せ。何とぞ親道犬が命を助ケ。遠島流罪になしてたべと。たつた一ト人りの親一ト人りの某。子の口より訴人して(四十六ウ)親を殺すは極罪人。コレ手を合す拝ます。山三殿。此足で踏にじり。蹴殺して下され。親の命のかはりと思へば。さら／＼といとはぬ我命。今シ生の情じや。慈悲じや。今首討たる、伴左衛門。モウ親人に対面は叶はぬ。其一ツ通を親の筐に見せてたへ。山三殿と。いひならへたる孝心シに。

山三山ハルも心迷まよはされ。ム訓、しほらしき一一言ごん。今く、し上ケ。將軍の御前ごぜんにて白状はくじやうさせる其方なれば。一一通迄には及ばずと。
詞地ウたるめばハツア是はく忝かたじけなしと。一一通そつと手に取上ケ。一一生しやうの願ねがひ忝かたじけなし。親の墨付すみづき見納みおさめと。涙なみだながらに挑燈ちやうどんの。
光りにはつと証拠しやうこの一一通。一一字も残のこらず焼捨やきすてたり。

山三見るよりはつと仰天拔^{うてんぱ}キ打に切付クル。傘^{かさ}にてはつしと受^うケとめ。山三。こりや何すりや。イヤ盗人たけぐしい。証
擲の一通なぜやいた。く、し上る腕廻せ。ヤ何（四十七オ）の科で。何の為に。シヤ儕レ。親子が悪ク事頭はれし上は。御
前シ引立テ白状さすはいやい。ム、、、ハ、、、ア、正直キはあほうの唐名^{かな}。たつた今おれが山三様拜^{かみ}ます。親の
命が助けたいと。泣いて見せたを誠と思ふか。あほうよ。皆うそじや。親子が悪事くとやかましい。何ぞ証拠が有ルか。ド

レ其証拠見たいの。イヤ見せて下んせ。ヲ、見せうと付ケ入山三。裾をはらへば飛上り。かはして打たる太刀先キに刀はかり。比は春雨。しんの闇悪に根づよき段平物。山三は手練の切先キこなたもおとらぬ手たれの末宗。打合ッ太刀音かつし。目先キへずつと。そつと身もよもあられう物か。しめて名古屋の二重の帯が三重まはる。昔しのぶの恋衣。歌と夜道の泥道に切ふせ討ふせ三重へ切付られて

伴左衛門。年比日比の（四十七ウ）恨の切ッ先キ。とゞめをぐつと山三が刀。泥も血汐も用水桶の水は幸イ手ばしかく。洗ひすつれば伴左衛門が死骸の首に金財布手に取上ケて。扱は葛城が身請の金。此儘に捨置カば人手に渡り。我盗しも同然。捨て置れず取れば盗賊。ム、くと一ト思案。よいくと死骸の太腹。十文字に裁切ッて。肺の臓へ押シ込ム金。肺は金なり。朽もとりけも同気求る腹袋と。跡の跡迄心をくばる。跡の祭へ番太のねとぼけ。ヤレ人殺し。出合に廓中。棒ちぎり木の真中を。さはがぬ侍大門シ口。太鼓打ッやらさはがしき。世の有様ぞ。三重へ定めなき

第九 相の山の段

名にしおふ。花の都に。ゑにしよぶ。西へ入日のさし扇。客の顔さへてりもみち。朱雀の町ぞ（四十八オ）なまめかし。賑はふ廓の其中に打ッたり舞たり舞鶴屋。伝三は牽頭半分シのお客饗す釣花生ケ。水際の立ッ和国大夫引舟禿が連レ三味線。出口の柳ふり分ケて。ア、貰ひ。きのふの今時分は出口の柳のいいやもや。検使の衆がいひ渡し客の名所留置ケよと。さびしい御詮義。和国様。相手の噂はお聞なされぬか。サイナ其相手の詮義がきついといふて葛城主。それはくきつい案じ。ヲツト皆迄おつしやるな。どこの噂も九分シ十分シ。おまへのやり手のみやを葛城様のやり手にして。検使の傍へ

突出した所に。何が此おみやがふるなの弁舌で。廊へ難のかゝらぬやう。言ぬけ事は言ぬけたが。今一ト案じは相手の詮義。おまへも多方ナ。すいしてゝ有ふと。噂半へ(四十八ウ)色かへぬ松の位の。遠山か。今は落葉の筈につる角くりも里なれて。草履げたゝ歩みくる。

伝三見るよりそりやとそおみや御来臨。扱きのふはきつゐお働廊中が拝んでゐる。おれは折節持病の疝氣。検使の傍へは出なんだか。様子はどふしや直に聞たい。されはいな。そのいしこらしさ何じややら。下手そふな侍が二頭。むせうにそこらを睨廻し。ヤイ。儕は葛城がやり手めか。此死骸は伴左衛門に極つた。葛城を受出す風聞先達で聞及ぶ。まだ外に身受をするといふ客有故此時宜に及ぶ。サア其相手は何者。儕がしらぬ事有まい。真直に申上よ。少にても偽らば水をくれる。と養ふても置様に権柄たらぐ。そこでわしも胴がすはつててんぼのかは。口に(四十九オ)任せてやつてくれうとずつと出てヲ、けたい。金くれるやり手に水くれるとはういた物じや。わし一人して十二人の大夫様方を廻せば。弁慶やり手がいそがしき口舌の中を押シ隔。打物業にてかなふまじと日に幾度の詫言やら。夜の身持は揚屋の吸物同前。ちよつちよと座敷へ出る度に一口宛も呑酒に。ふらくゝ眠のいきだをれ朝から晩迄緋の袴。花色繻子の巾着も。中は秋の夜の長紐。鑰の穴から天を覗はほのゝ明。よね様達の身仕舞ふろの手水の髪洗ひ。鍋よ杓子よ臼よ杵よ。正月仕舞は節句朔日けふは二日の払ひ日也。灸もすへたし卯は辰股せなかに腹。商売とは申ながら。神仏の奉加と申し事で。金出しながら拝ますはおそらく世界に(四十九ウ)傾城計り。かふてくれるが嬉しいとて親がゝりやお主持チ。恋路の闇の一寸先キ。目の鞘はづすがやり手の役。大事にかける証拠には世間ニに心中十ラあれば。廊に一トつ有かなし。人を剥のだますのと落る所は廊のなん。

伴左衛門様（地ハル）のお身の上大事に思ふ上の事。道で切（地ハル）れさんしたのは銘々の不調法。定めて死とも有（地ハル）まいし尤逃（ウ）ケても見さんしよし。そこに如（チヤギ）在も有（地ハル）まいが先（ツ）キの相（ツ）手がつよいのか。身の取廻（ツ）しのわるさかしらんでやんとやつたれば。検使（ケンシ）の衆もほつとして。モウよいはく死骸（シガイ）を牢屋（ラウ）へやれ。詮（セン）義（ギ）清迄（セイキ）は客の名所口。一チ々に書（ツキ）留（ル）よと。とふやらかうやら其場（ウ）はずらりと済（ツ）んだれど。其相手といふはナ。ア、是く。此伝三も夫レが氣づかひ。爰（ハシ）は端近（ハシチカ）。和国主（ワクノヌ）おみやマア奥へ。コリヤ中居共。お客（オクル）が見へたらしら（五十才）せよと皆々（ツクリ）へ奥へ入にける。

なごや山三。春平は。通（ツウ）ひ馴（ナレ）にし六条の。道には石がいくつ有（ツ）れ迄。読（ヨミ）覚（キ）たる一貫町（ツクハチ）の茶やが。葭（ヤシ）實（サ）の。よしやよし。里（地色中）に投（ハル）ケ打（ツ）ッ命（メ）ぞと。大門（ハル）の与右衛門も門番（バン）には二代の後胤（コウイン）。平（ウ）の供して口からく。舞鶴屋（フシ）にぞ入にける。

亭主（地中ウ）伝三を始めとして数多（オホタ）の女郎（ハル）やり手迄。是はく様子は（オ）聞なされふが。先ツ四五日もお出なされぬがよい筈。日比意（ヒヒイ）趣有（シユ）ル伴左衛門。切（ツ）り人は名古屋山三じやとどこ共なしの取（セ）りざた。我等夫婦（ワ）の氣遣（イ）此みやが弁舌（ベンゼツ）で。きのふはすらりとやりましたが。伴左衛門が死骸（シガイ）をなら漬（ツケ）にして後日の詮（セン）義。殊にお客の名所口。書（ツキ）しるせとの言付（コト）ケ。お身（地ウ）に覺がなふてから詮（セン）義まんぎもやかましし。おまへを外様（トモ）へつくばはせて此伝三が立（タ）ちませぬ。帳（五十ウ）面に留（ル）メぬ間に先（フシ）ッお帰りとひひければ。

イヤ伝三そふでない。お手前こそ念（ニ）シ。廊中女郎衆（クラウ）へ苦勞（ク）をかけた此山三。せんさくに合が悲しやか、んで居る程ならば。里通（モリ）ひもよね交もあたまからせぬがよし。先ッ和国様からお札申。大事のやり手をお借（カ）なされて忝（カ）い。扱（カ）みやの働心（ハルシヤウ）ざし詞の礼はいふ程ふるい。三千（チ）石取（カ）ッた山三が手をついて頭（カ）をさげる。額（ヒタ）に千（チ）石両の手に二千（チ）石。主人（地ウ）の外（ハルシヤウ）一生

に。此式作法はみや一チ人はが礼ぞと手をつけば。

ア、勿体ない何シのお礼が入ませふ。ちよつと葛城様に逢せていなしたいた物じやが。わたしがいけば目に立ッ。和国様一ト筆しんぜて下さんせ。イヤ文もいかゞじやわたしが直キに誘ふて。遊ヒに出る顔で連れましてきませふ。サア皆ござんせ（五十一オ）と座敷キをこそは立にけれ。

然らば爰は人もくる。二階へお通りなされませ。ヤレ何がこはふて隠れうぞ。伴左衛門を切たるを誰レとか思ふ。此山三が手にかけて討ッて捨たるぞ。葛城が意趣は纒の事彼れめと傍輩たりし時。狩野の四郎次郎といふ男筋目正しき武士故。身が取り持にて御ン目見へさせし所に。伴左衛門親子雲ン谷といふ絵師を引入レ某在京の留守を窺ひ無実を言かけ刃傷に及び。四郎次郎は行方知しず。剩御寵愛の姫君いてうの前。四郎次郎に心をかけ未々にては御祝言有ル筈を。妨入て狼籍し。某迄も浪人シの身と成ッたれば重々の遺恨有。殊に四郎次郎は隠れもなき名筆。大内絵所の官ンにもすゝむ身を。某しゐて国にとゞめ難義をかけ（五十一ウ）て見て居られず。姫君と夫婦になし四郎次郎さへ出ツ世すれば。本シ望／＼生ケておかば四郎次郎にいかなる怨をなすべきと。傾城の意趣を幸イに討ッて捨たる伴左衛門。知レて切ッ腹する計四郎次郎故にすてん命。いさゝか惜いと思ふにこそ武家に生れたふせうには。大門ン口で立テ腹切新艷衆や禿共。芝居でする様な事して見せう。ヤア葛城はどふじやの。亭主うたへと三味線の天柱に顔を筋かい身。糸の音色も目の色も人を切ッたる体はなし。亭主は結句色違へ先ッお咄しは入ラぬ物。内外の者共必仇口きくまいぞと。わな／＼震ひ手杓にてめつたに吞ンでぞ居たりける。

みやも聞より驚^キて扱^ツは我二世迄と。思ひ込^ンだる四郎次郎様にかく迄深き恩を見せ。命^ツをも捨^ッてんとはア、頼（五十二才）もしや忝^中や。我^レこそと名乗^ッて一^ニ礼いはふか。イヤ／＼。姫君とやらへ聞^コへては。御祝言の邪魔ぞと遠ざけらるゝは知^中れた事。只余所ながらあのお方の為^{ハル}に成^リ。お命を助るこそ我^ツ夫^トへの奉公と。思ひ定^メてコレ^色伝三様。お侍^調イの覚悟^{かくご}の上を女^リの了簡^{りやうかん}推^{すい}参^{まゐ}る事ながら。あのお方に腹切^ハラセ恩^{おん}を請^カけた四郎次郎。何^{いづ}国の浦で聞付^ケてもよもや生^キては居^ラれまい。人^{地中}のゆかりは知^{ハル}しぬ物^{もの}どれからどれへどふつて。たが悲しみとならふやら山三様のお身の難^{のが}。遁^ウるゝ工面^{くめん}は有^ウルまいか思^シ案^{あん}も今でござんすぞやと。余所をいふのも夫^トの事。案^{あん}じて余^ウの涙^{なみだ}の色^{いろ}胸^{むね}なでおろすも道理なり。

ヲ、わがみがいい通^調り。追^ツ取^ツて廓^{めい}の迷惑^{めいわく}お仕置^キには法^はが有^ル。腹切^ハりたいとおつしやつてもよふあたゝかに。見苦^シし（五十二才）い罪^{ざい}に粟^{あは}田^た口下からどふもはからはれぬといへば。山三はつとしてア、よい所へ氣が付^イた。三弦^{さんぜん}所じやないわいの。相手は主持^しチこちは浪人^{らうにん}あばれ者に仕^シなされ。梟^みのとまつたやうに獄門^{ごくもん}などにさらされては。先^は先祖^{せんぞ}一^ハ家の恥辱^{ちじよく}今さつぱりと腹切^ハつても。其段からは死骸^{しかい}迄いよ／＼恥^おは重^{おも}なる。エ、主持^{地ハル}タぬ身の無念^{むねん}さよと齒^は切^きりを。して涙^{なみだ}ぐむ。

みやは聞^中ク程^{ほど}我^{おとこ}夫^この。身^みにせまりくる悲^{かな}しさのどうぞよい分^{ぶん}別^{べつ}して。しんせて下^{くだ}され頼^{たの}ますと身^みに引^ひかけて歎^{なげ}く体^{てい}。亭主^{ていしゆ}暫^{しば}く思案^{しあん}しコレ／＼よい仕^し様^{やう}が有^ル。爰^{こゝ}へよりやと小^こ声^{こゑ}になり。是^{こゝ}を次^{つぎ}手に葛城^{かつらぎ}様を。とんと受^うけ出^でし奥^{おく}様に定^{さだ}める。時に親方^{おやう}と肌^{はだ}を合^あ。手形^{てがた}の日付^{ひふ}ケをとつと跡^{あと}の月^{つき}にして。外^{とぎ}様^{さま}へは借^か宅^{たく}見立^{けんたて}テの其間^{そのま}廓^{くわく}に（五十三才）少^ちし逗留^{たうりゅう}分^{ぶん}。すればとうから御夫婦^{ごふうふ}といふ物^{もの}よ。此^こ比^ひ迄^{まで}伴^{ばん}左衛門^{ざゑもん}が。くだいた状^{じやう}文^{ぶん}握^{にぎ}つてからは密^ま夫^ふの証^{しやう}拠^こ礎^{たか}也^{なり}。女敵^{にどく}討^うチは天下^{てんか}のお赦^{ゆる}し千人切^{せんにんぎ}ても切り徳^{とく}。此^こ分^{ぶん}別^{べつ}はどふ有^{ハル}ふ。みやは悦^えびヲ、／＼出^で来^きた／＼。めでたい／＼智^ち恵^ゑ者^{しや}めとそゝり立^たれば。ア、むし

やうにめでたがるまい。当分請出すお金がない。若お腰の物を夫迄の質物に遣はされば。私が加判で大夫様をたつた今。門ンを出して見せませふが。お侍イにお腰の物とはノウおみや。どふも申兼るはいの。ハテおぬしのお身計リか不便ンになさる、四郎次郎迄。命を助かる事なれば御了簡遊ばしませと。手を合するやら歎ケくやら山三も暫し指うつむき。大事の証拠は焼捨られ。言訳もなき浪人の身と心に涙持ながら。ヲ、何が扱（五十三ウ）く。皆の衆に苦勞をさせ何しにいなといふべきぞ。近比過分千万。コレ是は重代の左文字。二千五百貫の折紙有。おししとは思はね共。七才の時より今日迄つ小脇指一ト腰で。他所に居た事しらぬ身が刀の冥加につきたかと。涙は雨やさめざやの。主人の魂我思案奥深く。へこそ入にけれ

後姿を。見送りておいとしやく。伝三様どふぞ首尾して下さんせ。巻ぞへが入ならばわしが繻子の帯も有。八丈の袷もござんすと。歎けば俱に泣声のヲ、奇特によふいやつた。おれも男じや氣遣イすな囁を物嫁に売てなりと。埒を明ケぬといふ事は泣て出るぞ頼もしき。みやがうき身の。うき思ひ。口でいはねば氣につかへ目になる、は百（五十四オ）歩一チ。胸に涙のとこほり山三様に骨おるも。男の心の悲しみを。思ひやり手と成つたるものらぞんざいでなられふか。恋がこふじて遠山が此ざまになつたとは。しらぬか聞ぬか男めかどこに居るやら死ンだら。なしもつぶてもうつとりとたばこ呑ンでもさせるより咽が通らぬうす煙。人の見ぬ間に思ふ程泣をしよざいか。あじきなや。

内を首尾して葛城は走つてくるよりかけ上り。みや殿爰にかいかぬ世話で有つたげな。忝いぞや土に成つても忘れはせぬ。わしが心をさつしたも。ほんにく物日半に瘦たはいの。こなたは今は何シの苦もなうてらくである。やり手の身は浦山

し山地ハル様は奥にかの。ちよつと逢てこふぞや。後のちにくといひ捨て行フシを見るにもなを涙地色ウつらいぞういぞと（五十四ウ）いふ中にも男こを傍そばへ引付ハルては。うきを凌しのぐも力ちからが有アル此身ウには苦くも有ルまいとや。明め暮くれ付つきあふ人目にさへらくなやうに見ゆる物。遠国おんこくへだて隔た男ウ氣に思ひやりのない事は。無理無理共いはれず去ウりとは。せめて有ウりしよが聞きたいと声こゑを。立たてねばないじやくり。

氣地中も沈しづみ入いル時しもあれ心こゝろぼそげなこきうの声。哀あはれもよほす相あひまの山。われに涙しんをそへよとや。ゆふべあしたの。かねのこゑじやくめつ。ゐらくとひ、け共。聞て。驚く人もなし。とをりや。只の時さへ相の山聞きけば哀で涙がこぼれる。悲地しうてならぬどうぶくらに。あた聞とむないとをりや。くといふて涙にくれゐたる。

相相ノ山ハルの山ハル。あなた。友ともとしてはけちみやく。一つに珠数じゆず一いちれん是が。めいどの友となる。ア、したゝるい手の隙がない。のべより。あなた。友ともとしてはけちみやく。一つに珠数じゆず一いちれん是が。めいどの友となる。ア、したゝるい手の隙がない。（五十五オ）とをりやくといふ声に心に苦くのない新艘しんそう禿かぶ。ばらくと走はしり出で。こちら好すじや相の山。聞て泣なたい所望しよぼうくとと立たかゝる。エ、意路いぢのわるい子供こどもじや。それ程何か泣なきたい事。やつていなそときんちやくの紐ひもをといて取出です。錢は一せん二世の縁切えんぎしても切きれぬ笠の内。泣しつみたる顔見れば恋しゆかしの四郎次郎。互たにハア、ハア、と計はかりに目めくれ。心こゝろはしみぐと。抱付だききたうてもあたりにハ禿かぶが目もと小ざかしく。こらへるたけとつゝめ共ともむせびふくろび泣なゐたり。

ア、いなせましたらよい物か。まちつと哀な心をつたふて聞せて下くださんせ。あつと涙にするさゝら。胡弓こきうのつるもほそきこゑ。定めなき世に。捨うられて身みのじやく。めつがしらせたく文は。かけ共便べんりなし。ひとりねさめの。友ともとしては夢ゆめ（五十五ウ）に。見たよのおもかげが是が。ねさめハルの友フシとなる。

折しも二階奥座敷こいよくと手をたたく。アイ。あいくと禿共。立ッ間遅しと走り寄。コレかふした事も有かとうき命をも捨なんだ。よう顔見せて下んせと。すがれば男も抱しめ涙の。外は声もなし。

なふ恋しいの床しいのとは大い恋路のならひぞや。それをとんと打こして主親方にも背きし故。奈良伏見迄売り渡され今此京でやり手と成り。花の都も我身には鬼界が島に住心。ひゞ霜やけにくるしみても手足の苦勞は成りもせう。心をいためる計じやない力らわざにも才覚にも。叶はぬ物は逢たいと。思ふてやるせがなかつたとあまへ。くどくぞふびんなる。

四郎次郎も尽せぬ涙ヲ、道理く。そなた(五十六才)のかげにて大事の絵を書譽を取。契約たがへず身請をせうと思ふ間に。不慮の事共命が有ルといふ計り。恩をきた名古屋山三我故の浪人。行キ先もくめでたいといふ字は書やうも忘れて。

今は扇団の絵芦屋釜の下絵に露命をつなぎ。大津でとへば奈良にといふ難波で聞ケば伏見とやら。是は采女哥之助二人の弟子の介抱で。丸四年しめに顔を見て嬉しい事はどこへやら。おれといふ者ないならばとうによい仕合。前垂簾はさげまいと親御の事迄思はれて。生きた心はせぬぞとて男泣に泣ければ。

なふそふ打明ケて下んすがほんくの御真実。わしはいつそ親の事思ふ所へいかなんだ。わたしにはちが当らずばあたる者は有ルまいと。くどき立れば四郎次郎二人の弟子も俱(五十六才)涙。さ、らの竹もいにしへのしちに染る計なり。

や、有ッて四郎次郎先ッいふべきは。名古屋山三此所にて不破の伴左衛門を討ッて。詮義にあふ由洛中の取沙汰。遺恨のもと某故聞捨られぬ挨拶。廓の説はさればいな。くはしい事も聞きました山三様にする世話は。こな様への奉公。十ヲの物が九つ追ッ付塔か明ク筈で。アレ奥にじやはいな。是は大慶先ッ通ッて対面せう。イヤく待ッせそりやならぬ。こな様を尋出し。

姫君と夫婦にせねば侍イがすたと。いんまも今いふた人に逢ずといんで下さんせ。エ、愚痴な事計リ。我故に一命をはたそふといふ山三じやないか。げしう逢せまいなれば爰で腹を切ふか。ハテしなせではないわいな。外に奥様持ッまいといふ（五十七オ）せいもん立ててあはんせ。ヲ、姫君は扱置キたとへ餅屋のおふくでも。山三が詞を一ッたん立テずにおかれうか。エ、世間シ見た様にもない氣かせばいぞやと恥しむる。世間は唐迄知ッても氣は武蔵野程広うても。大事の男を人には添さぬ。とふぞ言ぬけらるゝなら。いひぬけて見て下んせと。又くどくの忍び泣。

尤々男の頬役。かういふ迎も何シの如在が有ル物ぞ。弟子衆こちへと涙ながら奥へ行間もおしまれて。コレ采女様うた様。祝言の咄しが出たらいひけして下んせと。頼む返事のいやおうは涙に紛らし入にける。

舞鶴屋の伝三郎いきり切ッて立帰り。コリヤくおみや。葛城様の身請さらりつと埒明イた。跡の三月二日に隙をやるとの一札。王様の編旨（五十七ウ）より高直キな物握つてきた。ヲ、めでたいく。イヤめでたい次イ手。そなたの親里から迎イの使イ。コリヤ男共。葛城様のお乗物。路次口から大庭へ早ふく。我等は奥で悦び酒追ッ付ヶおじやと。いひ捨てこそいさみ行。

程なく入くる修理之助。ずつと通つて手をつかへ。只今にてはお名もかはつておみや様。先ッはかはらず御息災の段御重畳。只今某おまへの親方。一文字屋へと参り御シ隙をもらひ請。お供して立帰れと父將監の御使イ。一刻なり共はやくと藪から棒の氣遣はしさ。時も時折も折。急に帰れは何シの用様子を早ふ。イヤ子細は道々申上ん。其駕爰へと昇入らせ。サア御こしと手を取れば。イヤくく今はいなれぬ。こつちにも大事の用。ム、大事の用とは。親御の絶体絶命（五十八

オ)に外の用事はござるまい。ヤア、父將監様のお命に。大事が有ルとは心元トない。サア其大事が有ればこそと。理非もいはさず無理やり駕に押シいる、イ、ヤ夫レではハテならぬと。用意の細引駕にぐるくサアいそげ。早ふくと追立テやり。跡にひつ添修理之助先ッ待タれよと声かけて。一ト間を出る名古屋山三。子細残らず立聞キせり。扱はおみやは將監殿の息女よな。かくいふは名護屋山三。將監殿の絶体絶命とは何ゆへと。いはせも立ず。ヲ、聞及ぶ名古屋山三。何故とはそれくしい。主君の御なんぎ姫君の御らう。存ながら遊所のほたへ。將監殿と契約の一ト思案を忘れたな。將監殿は將軍義輝公の疑ひ受ケ。囚れの身と成ッて昼夜の拷問。汝がごとき(五十八ウ)傾城の身請する馬鹿侍イ。サアかふいふが無念ンならば何シ時なり共館へ来れ。さらばくと悪ク口たらく。睨付ケてぞ帰りける。

跡に山三は黙然と指うつむいて思案顔。奥より伝三がいきり声。山三様是に何して。葛城様も座敷にござらず。残りのお方もお待ち兼サアく奥へ。イヤ伝三。よくく思へば浪人の此山三。又の主取願ふ身が。おつぱらいては世の人シ口。葛城は大道故。最前シの乗物に隠し置ク。やはりひそかに立帰らん。幸イの四郎次郎二人シの弟子に乗物か、せ。廓はさたなし。併シ祝言の夜は勝ッ手へ見まや。ハア、御尤。然らばひそかに何を申スも大事のお身。おさらば。重てくと。勝手へ立テば四郎次郎。二人シの弟子が乗物をすぐに小庭にかき出す。四郎次郎山三に向ひ(五十九オ)始めての葛城殿に対面もせず。酒の機嫌と有し故わざと遠慮。サア一刻なり共早く立帰らん。みやが身の上氣遣はしとせけ共せかぬ名古屋山三。乗物の傍に立寄り。コレ葛城。扱々きつる酒機嫌。始めての四郎次郎に顔をも見せず。鼻毛らしう此山三が。抱て乗セたる此乗物。サア廓の名残皆々にも。モウ此里で対面ならぬ。ちよつと顔をと乗物の。戸を引明ければ葛城が。替る姿の死骸の上に首計。

人々^ウ是^ハはと靨^{あわれ}顔^{いろ}シイ。主君^詞へ忠義^{忠義}の傾城^{かひ}買^ひ。子細^{こさい}を語れば長^{なが}い事。爰^{こゝ}は途中^{とちう}。采女^{うねめ}。哥^か之助^{之助}。乗^{のり}リ物^{もの}やれ

第十 絵文^{えぶん}の段^段（五十九ウ）

世^{ハル}の諺^{ことわざ}に閑門^{へいもん}は。月代^{うきやぎ}そらず花^{はな}も見^みず我身^{ワガミ}一^{ひと}つに哀^{あは}れる。西^ウの岡^{おか}の町^{まち}つゞき物^{もの}さびたる一^{ひと}構^{かまへ}は。画工^{くわこう}土佐^{どさ}が閑居^{かんきよ}の軒^{のき}。さいつ比^ひより将監^{ウツ}はいてうの前の御詮^{ごせん}義^ぎにて。将軍家^{ウツ}へ囚^{とら}はれの夫^{つま}トの身^みの上^{うへ}安穩^{あんおん}に。守^{まも}らせ給^{たま}へと神棚^{だな}へ燈明^{とうめう}お神^み酒^きの拵^{こしら}へは。又^{また}平^うが女房^{にようばう}お徳^{とく}。お師匠^{しせん}の御難^{ごなん}義^ぎ見捨^{みす}がたく。お家様^{ウツ}の手助^{てすけ}ケと。働^{はたら}く中に母親^{はは}は久^{ひさ}しぶりにて戻^{もど}つた娘^{むすめ}。祝^{いわ}ふてさつと浅瓜^{あさりなます}鱸^う。我子^{ワコ}に溜乳^{ためち}の切^きり刻^{とき}。親^{おや}の馳走^{ちそう}ぞしんみなれ。

母^{ハレ}は俎板^{まなこ}押^おシやりて。コレ^詞お徳^{とく}。おみつはまだ寝^ねてかいの。ほんにまあ親^{おや}の内^{うち}へ十年^{じゅうねん}シぶりで戻^{もど}つて。ためぐの咄^{はな}せう共^{ども}思^{おも}はず。氣^きがわるいとてねて計^{はかり}。イエぐあなたもお道理^{どおり}。ちいさい時から公界^{くがい}とやらいふ。術^{じゆつ}ない奉公^{ほうこう}して（六十オ）人^{ひと}の氣兼^{がね}。内方^{うちかた}へ戻^{もど}つて。ア、嬉^{うれ}しやと心^{こころ}もゆりて。がつくりと氣草^{きくさ}臥^ふでおねむいも理^{ことわ}り。ほんにいやればそふかいの。寝^うやるなら裾^{すそ}に物置^{もの置き}て。氣色^{うしよく}の悪^{わる}い風^{ふう}引^ひ添^{そへ}てたもんなと。勝手^{ふし}屏風^{びやうぶ}を引廻^{ひくまわ}し。殊^{こと}にけふは五月^{ごがつ}朔日^{しつじつ}。将監^{ウツ}殿^{どの}が内になら。祝^{いわ}ひ月^{つき}とて祝^{いわ}ふてゝ有^{あり}ふに。擲^{地ハル}に成^{なり}つて悲^{かな}しい身^みの上^{うへ}。こちら計安^{あん}穩^{おん}に何^{なん}シと膳^{ぜん}に直^{ただ}られふ。せめてぬしにも祝^{いわ}はん。と。机^{つくへ}に直^{ただ}すかけの膳^{ぜん}。心^{しん}は先^{まづ}キへとゞくらん。

夏^{地ウ}の日脚^{あし}も車道^{くるまぢ}いきせきとして修理^{はる}之助^{之助}。家主^{うち}伴^{ともな}ひ立帰^{たてかへ}れば。ヲ、戻^{もど}りやつたか待^{まち}兼^{かね}た。こりやお家主^{けしやう}様^{さま}もいかる御苦^{ごく}勞^{らう}。おまへ方^{はた}が遅^{おそ}さに。いやもふそれは氣遣^{きで}はしやるも尤^{なほ}。是^{こゝ}の御亭^{ごてい}もいてうの前^{まえ}とやらの有所^{うしよく}をいへと。けふもきつい御詮^{ごせん}義^ぎなれどしらぬといはるゝ。おれ（六十ウ）も白洲^{しらす}で逢^あつた故^{ゆゑ}。内^{うち}へ何^{なん}シぞ用^{よう}はないかと問^とたれば。状書^{じやうしょ}事^{こと}は御法度^{ごはつど}也^{なり}。

役人衆へ断ことわり。どこやらの詔あつらひじや迎。此絵を二枚言ことづけられた。詔あつらひた先さき様へ早はやふ渡してやらしやれ。それはまあいかるおせは。いやもふおれも術じゆつなけれど。家持けもちった役しよことがない。殊にけふは代官所でも。是の内へ急度きつと番を付くけよとかたい仰付おほせなれど。土佐の将監といふて。誰たれししらぬ者もない絵の名人めいじん。それで番ばんも付くけませぬ。其かはりには火の用心しんようして下され。又晩またばんに見舞みまいませう。お内義うちぎさらばと出て行。

なふ修理之助。もふけふは将監殿の。言いひわけ訳済で戻らしやろかと。心待しんたいちしたかひもなく。果はしもない御詮ごせん義。イヤ／＼今が詮義せんぎ最中。まだ此上に。水責みづせめ火責かせめのうきめをば見みせませうかと。それ計はかりり(六十一オ)が案あんじらるゝ。聞きこけは高嶋殿も姫君故に。押おシ込こまれてござれば。将監様は猶もつて心をいためて御座らふが。合点のいかぬは家主に。言ことづけられた二枚まいの此絵。若詔もしのイヤなふそんな覺おぼえはない。マア／＼中をとひらけば紛まがはぬ師匠ししやうの筆。土佐の流義りうぎの墨絵すみえの鶴つる。こちらはいかにと見れば同じく墨絵すみえの獅子ししの子。ハテ取合とりあぬ此絵このえがら。詔あつらひ人ひともない物をどふして書かいて来た事ぞと。妻うのふしんに修理之助。伝つたへ聞きこくに獅子の子を。数千すせん文ぶんの岩壁がんぺきより真倒まつまさに投なげ落おし。我子の気分きふんを見るといへり。何にもせよお師匠ししやうの。深い心を込こめられし。此絵には子細こさい有あらんと。一ト間の障子しょうじにはり付く。三人寄さんきよれば文珠もんじゆの獅子しし。鶴つるは千年せんねんのよはひを経へる。おぬしや娘の寿命じゆめうをば祝いわふてお書かきなされしか。どふかかうかと(六十一ウ)分ぶん別べつの底そこをふるへば。うた、寝の夢ゆめかおみつはおそはれ。むつくと起おき屏風びやうぶ引のけ。四郎次郎様。元信様とかけ出る。コレのふまちやと母お徳。引ひとゞむれば恠おどろりし。ハア。夢で有あったかのふこはや。思ふ事を夢に見るといふに違ちがはず。今見た夢をか、様聞やうきこて下さんせ。わしが勤としてゐる時。敦賀つるがでの名は遠山。三国で勝かッ山。伏見へ来て浅香山。やまといふ字を三度付くき。思おもへば熊野三つのお山

の名^{ナル}をけがし。午王^{コウワウ}の崇^{とが}も。恐^{フシ}ろしく。勤^{地中}をひかば熊野^{ハル}参り。幸^{ウイ}い那智^{ナチ}の観音^{カンオン}の開帳^{カイチャウ}も拝^{おが}んと。思^ウひねの夢^色心^詞。四郎次郎^{シロウジロウ}様と二人^{フタリ}り連^つ。参^{まゐ}ると思^{おも}へば。わしが此身^{まづ}が真^ま倒^{さかさま}。死^{地中}んだ人の熊野^{ハル}参りは。或^{ある}は倒^{さかさま}後^{うしろ}向^むキ。生^ウきたる人にかはるといへば。わしや死^上んだかと悲^{かな}しさに。それで声^{こゑ}を立^たてましたと咄^{はな}す(六十二オ)中^{なかつ}ちにも親^{おや}心^{こころ}。氣^きにはか、れど打^{うち}消^{けし}て。ヲ、何^詞のい^いの氣^きにかきやんな。夕^{ゆふ}部^ぶそなたに此母^{このはは}が。元^{もと}信^{しん}殿^{でん}をふつつりと思^{おも}ひ切りやといふてから。積^{しやく}おこらして寝^ねやつた故^{ゆゑ}。其^{その}様^{よう}な夢^{ゆめ}見^みやるも病^{やま}イのわざ。イヤくそれ計^{はかり}でもない此屏風^{びやうぶ}には。修理^{しゆり}之^の助^{すけ}が熊野^{ハル}の図^ずを書^かいて置^おけたが。お徳^{とく}殿^{でん}の鹿^{しか}相^{さう}で逆^{さか}さまに立^たて有^あ故^{ゆゑ}。おみつ様^{さま}の夢^{ゆめ}心に。倒^{さか}に成^なつて参^{まゐ}ると思^{おも}はしやつたも尤^{なほ}と。いふにお徳^{とく}も打^うわらひ。ほんにマアわたしが鹿^{しか}相^{さう}。今^{いま}の夢^{ゆめ}でおみつ様^{さま}。又^{また}積^{しやく}が發^{はつ}たそふな。こち^{こち}の人の吃^{どもり}の直^なつたは將^{しょう}監^{かん}様^{さま}のおかげ。其^{その}かはりにわたしがまゐしで。積^{しやく}の根^ね切^きつて上^うませう。奥^{おく}へござつてとつくりと御^ご寝^ねなれ。サアくお出^でと打^{うち}連^{れん}して一^{いつ}間^{かん}の。へ中^{なかつ}ちへぞ人^{ひと}にける。修理^{しゆり}之^の助^{すけ}声^{こゑ}をひそめ。おみつ様^{さま}を見るに付^つけ。此^{この}絵^えの心^{こころ}は。サイノ。(六十二ウ)母^{はは}も今^{いま}そふ氣^きが付^ついた。ぬしが囚^{とら}はれてござる時^{とき}。娘^{むすめ}おみつを銀^{ぎん}立^{たち}て呼^よびにやれとおつしやつたを。今^{いま}思^{おも}ひ合^あすれば姫^{ひめ}君^{きみ}のかはりに。あの娘^{むすめ}をと思^{おも}はしやる氣^きで有^あまいか。そふおつしやるので此^{この}修理^{しゆり}が所^{しよ}存^{ぞん}を明^あかさん。サアそれ聞^きたい。されば此^{この}絵^えは我^{われ}々に。師^し匠^{せう}の心^{こころ}をさとらす絵^え文^{ぶん}。此^{この}鶴^{つる}を薄^{うす}墨^{ぼく}で。地^ちをくまどりは夜^よルの鶴^{つる}。子^こを思^{おも}ふ心^{こころ}は同^{おな}じ夜^よルの鶴^{つる}と。詠^{よみ}たる歌^{うた}を思^{おも}ひ合^あせば。サアそれなれば此^{この}母^{はは}が推^{すい}量^{りやう}の通^とり。父^{ちち}母^{はは}の心^{こころ}は聞^{きこ}にあらね共^{ども}。子^こを思^{おも}ふ道^{みち}に迷^{まよ}ふは親^{おや}のならひながら。お主^{おな}の為^{ため}にかはい娘^{むすめ}を。殺^{ころ}せと母^{はは}へ知^しらせの絵^え文^{ぶん}。ア、成^{なり}ル程^{ほど}よい推^{おし}量^{りやう}。此^{この}獅^し子^しの子^こと書^かク文^{ぶん}字^じ。獸^{けもの}扁^{へん}を取^とれば師^しの子^こと読^よむ。修理^{しゆり}が為^{ため}には師^し匠^{せう}の子^こ。おみつ様^{さま}切^きつて出^でせとの教^{おし}への絵^え文^{ぶん}に極^{きよく}つ(六十三オ)たり。又^{また}平^{へい}風^{ふう}情^{じやう}が書^かいたる絵^えさへ。尺^{しゃく}余^よの石^{いし}を通^{とほ}せしも皆^{みな}一^{いつ}心^{こころ}のよる所^{ところ}。況^{いはんや}

師匠將監殿心をこめて書キ給ふに。ふしぎなふて叶はぬ筈。サア奥様。此絵を突て心見給へと。指添さしぞへの小柄ハルブカひん抜色キ指出せば。ヲ、そりやふしぎが有ふ。ふしぎが有ばあのおみつを殺さにならぬ。よふ思ふても見てたも。十年ふりて戻つた娘。いかにお主の為なればとて。かはいげになんとあの子が殺されう。殺さ地ハルにやお主へ忠義も立ず。其上夫トの命もしれず。どちらをどふ共此母が心の中チ。思ひやつてと計フシにて暫中し。涙ハルにくれけるが。

ア、そふじや。娘は母に付ク物なれば。夫のさけしきも恥しければ。娘が事はふつつりと思ひさろ。した詞が此絵は。ぬしの魂たましをこめてか、れしを。切り裂は夫を切きるも（六十三ウ）同然どうぜんなれば。此母は得切えきまい。そなた獅子ししの絵を切つて見や。イヤ此修理は猶以なつて。御恩有おんル師匠の筆。心を込めてか、れしを切きるは師匠を切きるに同し。此義はまつひら御用捨もちやと。互フシに辞退なの折こそ有し。

名古屋山三春平遙はるかの跡に乗物つらせ。又ウ平が案内にて御老母に対面たいめんせんと。ずつと通れば修理之助。刀追ハルツ取色つつ立上り。ヤア山三。此間は遊所故見赦ゆるし置おキしが。生煩なまづさげてよい所へよう来たな。いふに及ばぬ事ながら。汝が主君義賢卿は閉居へいこいてうの前は流浪るろうの御身。其御なんぎをよそに見てのふくと島原通ひ。葛城を請出せしとちまたの風説違ふうせつちがひはせまい。師匠將監は。不忠者の汝には事かはり。姫君故に將軍家へ囚とらはれ只今の命も知しず。のめくと將（六十四オ）監殿計。責殺せめされふ筈はずなし。師匠地ウの鬱憤うつはん主君の罰ばち。一時にはらす覚悟かくごせよと。すらりとぬいて切かくるを引ひばづし飛しさり。先詞ッ待テ修理。山三が一言いふ事有。ヤア待テとはおくれかと。忠義一途ちゅうぎいつづに凝こつたる修理。りふじんに切付きりくるを元来名もとよりにおふ手だれの山三。かいくゞり刀持タチ手をしつかと取中ル。とられし物と修理之助捻ねぢあふ拍子取ひょうし取ハル拍子。障子しょうじにはつたる獅々の絵の真

ン中ぐつと突通^{つぎ}せは。あやしや獅^し々^しを彩^{さい}しく血^ち汐^{しほ}。るい^{ハル}く^{フシ}と流^{ハル}るれば。

ヤア獅^し々^しの絵^えからソレ血^ちがいのと。母^母の詞^詞に驚^{おどろ}く修理^{ハル}。ヤア此^こ獅^し子^しの絵^えに血^ちをそ、ぎ。名画^{めい}の奇^き特^{とく}頭^づはせしは。此^こ修理^{しうり}が推^{すい}

量^{りやう}の通^とり。おみつ様^様姫^{ひめ}君^{きみ}の御^ご身^みがはりに立^たてよと有^あル。師匠^{しせう}の存^{ぞん}念^{ねん}通^とぜし物^{もの}と。詞^詞の中^{ちゆう}に又^{また}平^{へい}つつ立^たつ間^{かん}の障^{しょう}子^し（六十
四ウ）押^おしひらけば。あへなやおみつはめての乳^{ちち}の下^{した}突^つ通^とされ。朱^{あけ}になつて伏^ふければ。ヤア是^{こゝ}はと。驚^{おどろ}く山^{さん}三^{さん}修理^{しうり}之^の助^{すけ}。母^母

は手^て負^{おひ}にすがり付^つキ。扱^あは最^{さい}前^{ぜん}ンと、様^様から絵^え文^{ぶん}の来^きた咄^{はなし}シを聞^き。切^きラれる覚^{かく}悟^こでゐやつたの。其^{その}心^{こゝろ}を露^ろ程^{ほど}もおれにしられて
たもつたら。仕^しやうもやうも有^あふにと。かへらぬ事^{こと}をくり返^{かへ}しくやみ。歎^{なげ}くぞ道^{みち}理^りなる。

おみつはくるしき。息^{いき}をつぎ。ヲ、か、様^様の推^{すい}量^{りやう}の通^とり。修理^{しうり}殿^{でん}と二^に人^{にん}の咄^{はなし}シ。残^{のこ}らず一^{いっ}ト間^{かん}で聞^きたる故^{ゆゑ}。姫^{ひめ}君^{きみ}のかはりに
成^なつてと、様^様の御^ごなんぎを。救^{すく}ふはわしが覚^{かく}悟^この前^{まえ}。いふて返^{かへ}らぬ事^{こと}ながら敦^{とん}賀^がで。勤^{つとめ}る時^{とき}よりも。四^し郎^{らう}次^じ郎^{らう}様^様とは二^に世^せ

迄^{いた}と夫婦^{ふふしよ}の約^{やく}束^{そく}せしか共^{ども}。先^{まづ}ッ一旦^{いつたん}シは姫^{ひめ}君^{きみ}と夫婦^{ふふしよ}にならねば山^{さん}三^{さん}様^様へ。義^ぎ理^りが立^たぬとおしやる故^{ゆゑ}。所^{ところ}詮^{せん}此^{こゝ}世^よで添^{そは}ねば。
わしやふつつりと思^{おも}ひ切^き。恨^い有^あル（六十五オ）姫^{ひめ}君^{きみ}にかはつて死^しるが心^{こゝろ}底^{てい}を。男^{おとこ}に見^みせる傾^{かた}城^{じやう}氣^きそれ故^{ゆゑ}に覚^{かく}悟^こして。切^きラ

る、心^{こゝろ}でゐたわたし。と、様^様のか、しやつた。獅^し子^しの絵^えに娘^{むすめ}の血^ちをあやしたは。親^{おや}子^この心^{こゝろ}があふたといふ物^{もの}。サア一^{いっ}つ時^{とき}も
早^{はや}ふわしを殺^{ころ}して。姫^{ひめ}君^{きみ}や。と、様^様の。なんぎをすくふて下^{くだ}さんせと。流^{なが}る、血^ちより先^{まづ}ッさきへとゞめ兼^{かね}たる。涙^{なみだ}也^{なり}。

コレそなたが姫^{ひめ}君^{きみ}にかはつて死^しるに及^{およ}ばぬ。エ、其^{その}心^{こゝろ}底^{てい}を早^{はや}ふ聞^きいで残^{のこ}念^{ねん}シ。今^{いま}修理^{しうり}之^の助^{すけ}に相^あ手^てにならぬも。山^{さん}三^{さん}が所^{ところ}存^{ぞん}シ
を明^{あき}カさん為^{ため}。我^{われ}島^{しま}原^{はら}へ通^とふたる。子^こ細^{こさい}を見^みせんとつつ立^た上^{あがり}り。乗^{のり}物^{もの}の戸^{かど}を押^おしひらき出^ですはけやけき女^{むすめ}の首^{くび}。諸^{もろ}手^てにさ、
げ手^て負^{おひ}に近^き付^つキ。是^{こゝ}こそ高^{たか}嶋^{じま}の姫^{ひめ}君^{きみ}。いてうのまへ様^{さま}の御^ご首^{くび}と。いふに驚^{おどろ}く母^{はは}と修理^{しうり}。手^て負^{おひ}もくるしき目^めをひらき。死^し顔^{がほ}を

よくく見て。ヤア詞(六十五ウ)此首は太夫さん。葛城様シじやないかいな。どふして切地上られさんしたぞ。のふいとしやと身の疵きずを。いとウはず泣中も。なじみだけ。

山三地ウは首を器うつはにのせ。末ハル座に居直る。只今修理が某を。恥しめしごとく。主人義賢卿は閉居へききよ。姫君はお尋者。殊に山三を御勘当かんちやうなさる、時。某をひそかに召され。勘かん当は表テ向向き。行方知レぬ姫が事。頼たのムと有ツて雲雲龍の。硯の片われ給はりしより以来このかた。姫君に心をくだきし此山三。何面目に傾城狂めんげくひ。此葛城が顔形かたち。姫君に似にたるを幸イまさかの時の御身がはりと。思ひ寄ツたる島原通通ひ。今日只今此首を姫君也と。將軍家へ持参セせば主人の閉居は勿論もちろん。將監の囚とらはれ迄。一時に落居地ハルせんと。聞にはつと悦ウぶ母。修理之助は手をつかへ。左程忠有ハル(六十六オ)山三殿。其心とは存ウぜず。是迄の悪ウッ口雑言ざうこん。慮外りよくはいを御免ごめんシ下スさるべしと頭を。さぐれば又平も。目には涙ハルを中持ハルながらおづウく這出はひ山三様。もふ泣詞ても大事だいじござりますまいか。ヲ、親子の別ちれ。暇いとま乞こひをと首指寄ハルスれば。女房共詞。早地ハルふくと呼声にお徳はト間を走り出。かはひの形なりやと葛城が。首うかき抱いだしやくり上フツかつばとふして。泣中ゐたる。

又平地ハル漸やうく顔色を上詞。此葛城はふたりが中の娘。ちいさい時はおゑ様がかはゐがらしやまして。ちよこくとお膝ひざを濡ぬしました。尼あまめでござります。顔も相応さうおうに生れ付き。此で、親の吃くにも中にハルず。弁舌べんぜつもよい様にと。お弁と付そだてけて育そだし折から。お師匠は御浪人にてせつなき世渡り。土佐の名字を立んとて。お一人のあのおみつ様を。遠とい敦賀へ(六十六ウ)人知れず傾城奉公。跡で聞て夫婦は恠びつり。お師匠の娘御売うらして。弟子の身で見みてゐられず。此お弁べんを十一から島原へ奉公にやり。それとはいはず其金を。奥様へ上上しましたは。定さだめて覺てござりませう。時に此度姫君故に。將監様の御難義見捨なんぎがたく。兼て山

三様を頼置キ。請出して貰もらひましたも。娘を姫君のかはりに立テ。お師匠の御難シ義を救すくふて貰もらふ為計。ちいさい時から人手にかゝり気苦ぐらう勞つとめな勤。日外いっそやもナア嘯か。石山参りして寄よつた故。女夫の者がいひますには。コリヤ。お主の為にする勤じやぞよ。身を達た者に奉公せよ。定て灸もまだであろと。灸嫌きひな者を。あついまさしてむりやりに。折角せうかくすへてやりましたがコレ見さしやりませ。つゝ首切地られて死おりました（六十七オ）と大声スエデ上上けて泣中さげぶ。

道理地と修理いん之助。老母は猶も涙中にくれ。ヲ、又平悲しかろ。武士ならぬ職しよく人中の身で。師匠の為にかはる子を。殺してたもる。志こころざし。いつの世に忘れう。コレ手を合して拝地ムぞや。殊つにお徳は女氣でけがな悲しい顔もせず。いそぐ仕やつた心の中推量すいりやうしられていといと。聞より女房も取乱フシギンし前後ぜんごも。しらず泣中ゐたる。

山三地も目を押シのごひ手負に近色カ付詞キ。今そなたも聞詞かる、通。姫君の御シかはりは此葛城。さすれば死てもせんなき事。手も浅ければ。氣を慥たしかに疵養きずやうじやう生。時節しぜつを待中つて元信に。添そはふと思ふ氣はないかと。力地ラを付ハルければ目を中ひらき。ア、山三様。

よふおつしやつて下色さんした。そんならわたしは。姫君の身がはりにもならず。今死れば犬死か。ハア。ア、悲しや。思ふ男（六十七ウ）に添そはれはせず。せめては連中れ添そは姫君の。御身にかはろと思ふたに。其望地さへ叶のぞみはぬか。思上へばくわたし程夫トに縁のない物が又と一人リ有べきか。今死る氣でふつつりと思ひ切ふといふたれど。此世に居れば何シばでもわしや。思ひよう切ツらぬ。それ程思ふ元信様を。人中に添そはせて。そもやそも。何地ンと生中きて居中られふぞ。其うきめを見よふより。早ふ此手ツでわしや死ツたい。くるわでは葛城様が。やり手には苦ハルもなふて。浦山ツしいといふた人。死ツなしやつて苦ガが有ルまいと。ではああなたが浦山ツしいと。泣ツくどけば母親中も。涙ながら獅子ハルの絵取ツて。コレおみつ。今死にやれば將監殿に。もふ逢事はな

らぬぞや。此絵を父の筐ハルと思ひ。肌身はだうも放さず持つて居や。あの世へい（六十八オ）きやらば西方浄土文珠じやうどもんじゆの獅子の座を分けて。此母を待つてたもと。絵図ハルを渡せばイエ色くく。仏詞々に成ル事わしやいやじや。たとへ此身は蓄生ちやくじやう共。獅子共成つて。元信様に付そひ添たいと。獅子の絵取つて肌身はだ色に添詞エ。ア、くるしや。くくと身をもみ歎けば手疵きずより。胸へ指込詞ム。恋病土。
エ、四郎次郎様に。今一チ度。あふて死たい。くといふ声次第によはり果。早たへぐに成りければ。又平夫婦修理之助いだし拘かへて介抱かいほうの。其かゝもなく息絶る最期の念のいぢらしさ。母は見るより正体なく。ア、悪縁うとはいひながら。かはるや今はの際迄も夫トをしたひこがれ死。最前う娘が逆さまに成つて。熊野へ参つた夢咄し。今思ひ合すれば。親が残つて子を先キ立立るは逆さま事。（六十八ウ）其しらせ悲しやと。あへなき死骸しがいを押ウうごかし。身を投フシキンけふして泣涙そば傍も。袂はなをしほりける。

又平は涙ながら。お師匠様も此弟子も。一人り娘を殺すのは何詞ぞの報むくひでござりませう。私は先ツ。元信殿の方へ参り。姫君に娘が首。何とぞ見せたうござります。ヲ、ともかくも心任せ。山三も跡より追付中カンといふにしほく立上地上れば。せめてま一度死顔に。暇いまこひ乞をと取詞付クお徳。エ、皆見てじやに未練みれんなはい。死ハルんだ娘の顔が。何シの見たい事が有。放せ。くくとふり切れば。力なくく女房も跡見送ハルつて諸共に。亡骸なきからの跡先ハルキをいだし拘かへる母と修理。山三ものべのいとなみと打連ハルし。

へ一間に入相ハルのかねもいつより。哀あはれそふ早暮ウレ過フシる五月間。又平は娘が事思ひ廻中して行道も。口詞に称名せうめうぶつくと。（六十九オ）物いふ事は吃どもらねど心はどもる。我子の別れ。

氣もすみ渡るのちの風。ぞつと吹くる其中に。むざんやおみつは今迄。夫トをしたふ執着に。ひかれて迷ひくるぞ共。
思はずしらずふり返り。誰レじや。ヤアおみつ様か。おまへは今しなしやつたに。どふして爰へ。フウ聞へた。扱は元信殿
に心ひかされ。おれに付いてござるの。エ、迷はしやつたの。ア、道理じや。したがよふ合点さつしやれ。元信殿にはいて
うの前といふ奥様が有ルぞや。ぬしの有ル男を恋こがれて。幽霊になるとはよつほどの無分別。ふつつりと思ひ切て。うか
む様になされませ。なむあみだ仏く。ハア合点がいたやら消られた。どふでも公界勤メた人は。よふ物を聞分けてじやと。
一人りつぶやき行向ふに。しよんぼりとたゝずめば。

おみつ様又かいの。ア、聞(六十九ウ)分ケのない。コレおれが娘を見さつしやれ。物をよふ聞分けて死ともない顔もせず。
得心して切られたはいの。おいら風情が娘でさへ其通り。おまへは將監様の娘御でないか。ア、嗜しやれ。サア合点が
たら消た。なむあみだ仏く。ハア得心がいたそふな。そふなふては叶はぬ筈。もふ邪魔は入ルまいと。道を急げば急
ぐ程跡から。したふかげろふの。其、佛に恠りし。仏の顔も三度といふに。幽霊の顔を三度とは。コリヤひつこい。何
ぼ念シ仏申ても。うかむ氣はないじや迄。ハテ何シとせう。勝ッ手にさしやれと言捨に道を。はやめて。三重へしほれ行

第十一 赦免の段

刑罰極つて三度はを奏すとかや。佐々木殿の都の館閉居の内はひそくと。道大雲谷膝を(七十オ)ならべ。悪ク事の臍を
かたむる所へ。

ずつと入くる黒川当馬。道大老是にか。主人国長申渡すは。此方に捕置きたる將監め。様々拷問にかけてもぬかさぬ上。

今日聞^ケばなこや山三。姫が首討^ツたる由いかにしても心へがたし。何はとも有^レ義賢を仕廻^ツて取^ルが近^カ道。其為^ハ当馬を遣^ツす間。ともかくもよい相談^{そうだん}。ノフ雲谷そふでないか。成^ル程^く今も今評義最中^{へうぎさいちゆう}。山三めに先^ニ取^ラれては工面^{くめん}がぐはらり。一刻も早く義賢^{ハル}をシイ。高い^詞道犬も其心付いた故。三八を寢所へ廻^シておいた。雲谷はソレ花壇^{くはだん}の傍^{あた}り合点か。急^{地ハル}ケと詞の下。奥庭^{フシ}深く入^ル折から。

浅川^{地ウ}殿より上使として。三木^{ハル}の進^シ殿御^ウ出也と披露^{ひらう}の聲。ハレ心へぬ上使呼はり。何事成^{ハル}ルぞとためらふ所へ。しづ^ウく入くるなこや山三。二人は見るよりヤアそちは。ヲ、驚^詞キ尤。浪人^{ろう}の此山三。浅川左京殿召^シ出され。則^チ義輝公の御書持^{しよ}参^{ハル}の使者。謹^{つしん}て聞^ケかれよと。上座^{地ハレ}に直^ッり一^ッ通取^出し。此度^詞不破^{ハル}ノ道犬。三好国^{七十ウ}長に荷擔^{かた}せしめ。義賢^{ハル}に科^{とが}を拵^{こしら}へ家国を押領^{おうれう}の計略^{けいりやく}。剩^{あまつさへ}折を窺^{うかが}ひ。將軍家をしいし奉らんとの間^コへ。なこや山三いてうの前が首を指上。逐一^{ちく}に言^{ハル}上の間道犬が科。重罪^{ちゆうざい}遁る、所なし。急^ウ召^シ捕来るべき旨。浅川藤高承はると。読^よ中^{ハル}チよりも俄^{にはか}にうろつく黒川当馬。道犬^ウは道^{みち}の老切^{おき}ハ、其手はくはぬ^詞。佐々木^{ささき}の家の詮^{せん}義。浅川連は頼ぬ。夫^それはとも有^レ。よい所へなこや山三。粉^{せがれ}が敵と抜^キ打^ハに切^{ハル}てか、るをひらりとばづし。利腕^{きうでつかん}摑^{つか}でもんどり打^ツタせ。ヤア動^{うごく}まい。只今室町殿へ参^{ハル}上し。何もかも打明^{うちあ}けた。上使といふたはうぬらをくはす謀^{はかりごと}。引立^{ひだ}てて面縛^{めんはく}さすると用意^{ようい}の早縄高手小手。コリヤたまらぬとかけ出す当馬。どつこいさせぬと又平が。とくより知^ツた三好が郎等。俱^{フシ}にくる^{ハル}三寸縄。

聞^{地ウ}た^{ハル}と義賢卿立^{ハル}出給^{ハル}ふこなたより。いてうの前四郎次郎^{ハル}將監^{ハル}が伴^{ハル}ふて。親子主^{フシ中}従^{ハル}一^ツ時にたへて久^{ハル}しき御対面^{たいめん}。將監^{地ハル}(七十一オ)山三^色詞^を揃^{そろ}へ。いさゐは重^{ハル}て申上^{ハル}ケんと。面^{地ウ}ンタ取^出す。硯^いの片割^わ。二^ツつを一^{ハル}つに合^はせ持^は。離^{はな}ぬ縁^{えん}の四郎次郎

殿。御掣樣と進れば。

ヲ、よくぞ計ひし。去ながら汚名を請たいてうの前。其儘には添されまじ。雪といふ字は清共。又すゝぐ共説なれば。今より狩野の雪姫と改めて。今宵ひそかに内祝ひ用意く^中と宣へば。俄にかざる島台に。相生イの松高嶋硯。家の繼目と賑はへり。道犬当馬がふくれ頬。無念く^ウとぶつつくを。引立さする山三が下知室町。殿へと三重へ急ぎける

第十二 反魂香の段

雪姫君の御祝言規式終れば 娵衆。お色直しの御酒機嫌サアく^中お寢間へく^中と。賑はふ心も広椽伝ひ。春平が忠義にて。むすぶゑにし^{ハル}のなごや帯。とけぬ心の。四郎次郎。寢屋のこなたにもくぜんと。(七十一ウ) 物をもいはず涙ぐみ所存。有げの風情也。

姫は今宵を。待ち侘し。閨のむつ言氣もせかれ。サア寢よふ共早ふ共いはでの森でしれかしの。目元を悟るおこしもと。是は扱聲君様。何を爰に御思案顔。初ッ床からのもたせぶりあんまりななされやう。サア姫君様お手引いてとそやし立ッれば雪姫君。かたはは袖におほはせてじつと手を取すり寄ッて。藤ばかりと名をかへてだまして叶ふた恋なれば。お氣に入らぬが定じややら閨へ行のがいやじややら。土在の娘の遠山にお心が残つてなら。今からわしを遠山と思ふて添て下さんせと。聞クより元信手を打て。ハア、それよ誤つたり。かの漢王は。李夫人の別れを歎キ。閨のとめ木の香爐に。反魂香を炷給へば。倂煙に頭はれて抱きとむるにもと、まらず。絵にうつせ共物いはずそれは恋路に迷(七十二オ)の帝。我は絵筆の伝授を請ケし義理の恋路に迷ひしは。恋路の外の恋の義理。雪姫を今日より遠山と思ひ添ならば。絵にもまさつて義理も立

チ心をとめし此起請。反魂香と思ひなし。煙となさは遠山が。四郎次郎へと宛名せし我も煙りと成たる同然。是に増たる事あらじと恋の悟に絵の悟り。ひらく守りの中々に。血をあやしたる三熊野の牛王取出し押戴。親の為とはいひながら敦賀の里に身をしづめ。暫し伏見の契り故売れ買れて三国迄我故にするうき苦労。取も直さず菩薩の行是我為の知恵文珠。あの世は獅子の座を分けて未来の契りを待チ給へ。ちかひおこたる事なかれと起請くゆらす大香爐へ。ばつこもへたる紙よりも。神のとがめる目くるめき。うんと二人が正体も夢か。現か幻か。何か。あやなし三重（七十二ウ）

夫乞かげろふ姿

きやらの香は。只一トすじに思ひこむ。女心に引かへて。二タ道かくる。あた人の。男の心炷物に。合せ兼たる恋の道。たくや起請の紙ならで。煙の中に顯れし。遠山が立チすがた。恨も。恋も。残る世の。もしや。心のかは。りやせんと。思ふ疑ひ。はらさん為のせいしをば。なぜに。煙となし給ふ。うらめしや。今は恨のしもにてうつも。現か。打たる、も現共なきかげろふの。男の傍へ立ちよりて。コレ折角逢にきた物を。聞ぬ顔とはどうよくと畳。た、いて泣ければ。（七十三才）姫元信は夢心地。コレ其やうに恨でも恨られてもぎりといふ。文字につながれ今さらにしぬもしなれぬわれが身を。思ふて見たがよいはいの。イヤくくく其言訳はみんなうそ。おまへの筆の絵そらごと。ほんに勤の其中も。もしやそよとの音信が有るか。ないかの占ひに。かんざしぬいて畳さん。あふも逢ぬもあはぬも逢も。客に男の行衛をとへど。誰もしら雪つもられて。果はうき身をなりさがり。人もあれみやコレみやと。大夫かぶろに憎まる、恋路の関に立ッやり手。身につまされて儘ならぬ。余所の玉づさかよはせど。我身の文は（七十三ウ）便りなく。もしや心がかはりはせぬか。

ア、思ふまいふつとりと。いくせのあんじ。せまいぞとたしなんで見ても情なや。此まあお顔のほそりやう。昔思へばなつかしや。一夜の縁も仇枕。まくらなけそ。なけそ枕にとがもなや。見れば佛にたつとの。腹立のうき世やあら。うらめしの姫君と。猶つきそふやりんゑの車くるり。我を夫こそ。迷はすれ。思ひしらさん思ひしれ。此世はわづか主従の。縁もきづなもあらばあれ。恨をなさで置クべきか。来れや。来れと。こくうを摑で引戻す。ありもすそもほら。せいしの鳥は明ヶの鳥かはい。七十四オ）となくねにつれて。夢か現か現なき。聞のともしびかげくらく行方。しらず成ければ。思はずしらず閨の戸に。身はひや汗の夢さめてこはやくの涙声。男も同じ正夢の。死霊のたゝりしづめんと。現世の祈禱後世ばだい。仏事をなすや音楽の声すみ渡る。三重時しもや。卯月半の空さへて。日かげにか、やく。しろかねの。襖に画く唐獅子に。死たる人のうつる共しらしやしらじ生類の。姿をかりの。うき世の中。我しも迷ふやさまぐの。四季折々のたはふれは。蝶よ小蝶よせめてしばしは手にとまれ。見かへれば。花のこかげに見へつ。かくれつ羽をやすめ。姿（七十四ウ）やさしき夏木立。心づくしのナ此年月をエ。いつか思ひのはる、やと。心ひとつにあきらめん。なんのさら。さらに恋はくせ物。折しも今はぼたんの花の。咲やみだれてちるはくちりくるは。ちりく。ちりかゝるやうでおいとてねられぬ。花見てもどろ。花にはうさを打わすれ。わりて見せたき。心のたけを。ひとよぎりとは。ふしのある夜。思ひそめた今は。なんの。へだても。かきもなや。心のたけを。ひとよぎりとは。ふしのある夜。思ひそめた今は。なんの。へだても。かきもなや。今さらに。ぼたんにたはふれし、のきよく。げに（七十五オ）しやつきやうのありさまは。しやうかの花ふりしやうちやくきんこ夕日の。雲に

きこゆべき。目前ハルのきどくあらたなり。暫ハルくまたせ給へや。あうがうの時節ハルも今いく程に。よもすぎしハルし、とらでんの
 ぶがくのみぎん。くハル。ぼたんの花ぶさにほひみちくハル。たいきんりきんのし、がしら。うてやはやせやぼたんほうハル。く。
 こうきんのすいあらはれて。花にたはふれえだにふしまろび。げにもうへなきし、わうのいきほひ。なびかぬくさ木もなき
 時なれやばんせい千秋ハルと舞おさめ。くハル。し、の座にこそ直りけれハル(七十五ウ)とくより忍び犬上三八長谷部雲ハル谷。奥の
 間さしてかけこむ所に。かけ来る名護屋山三四郎次郎。二人が首筋ひつつかみ。どうど打付ハルケ。悪人ハルほろびし悦びと死靈ハル
 の獅子の物がたり。先ツ々殿にも此由をかたり近江の高鳴や。お家のしんの名護屋帯ハルとけて。嬉しき雪姫の。願ひも狩野の
 四郎次郎古法眼ハルとて今の世に。ほまれを顕はす墨色の空言ハルならぬ世語ハルりを絵にこそ。残しとめけれハル(七十六オ)

宝曆貳年

吉田冠子

壬申

作者

中邑閨助

三月廿三日

三好松洛

(七十六ウ)

右之本頌句音節墨譜等令加筆候

師若鍼弟子如縷因吾儕所傳沂法師

之源幸甚

竹本筑後掾相傳

竹本大和掾宗貫

予以著述之原本校合一過可為正本者也

竹田出雲掾清定

京二條通寺町西江入町 山本九兵衛版

大坂高麗橋二町目 山本九右衛門版

江戸大傳馬三丁目 鱗形屋孫兵衛版